

＜いま＞田村明を＜読む＞ということ

—田村明の社会学的研究構想—

東京大学人文社会系研究科社会学研究室 青木 淳弘

本日の報告の流れ

1. 導入：なぜ田村明を社会学的の観点から研究するのか
2. 分析：どのように田村明を社会学的に研究するのか
3. 展望：現状の共有と今後の見通し

導入

冒頭のタイトルの意味＝＜いま＞田村明を＜読む＞ということ

- ・いまは参照される過去によって照らし出される。
- ・田村明の参照されるべき功績＝「都市計画の読者」を生み出したこと。
↓
- ・字義通りの意味としては理論としての「まちづくり」に多数の読者がいる。
 - ・官から民へ…地区計画制度やまちづくり3法など。。
 - ・まちづくりのアクターの参与・多様化

社会学的な観点から＜読む＞ことを考える

- ・「読む」という実践＝相互行為
 - ・著者は経験や資料に基づいて自らの思考を言葉にする（＝著述）
 - ・読者は著者の言葉を自由に解釈する（＝自由な解釈への展開）
 - ・著者は読者の解釈を解釈し思考を組み立てる（＝再帰的読解）
- ↓
- ・相互行為として田村明を「読む」ことは書物に限定されない＝田村の実践を読む
- ・他方で理論としての普遍性を同時に問題にしなければならない。
 - ・バズワード（もっともらしいが曖昧な言葉）の危険性

問い：なぜ＜いま＞田村明が読まれるのか？それは誰が＜読む＞のか？

cf：ハーバート・ガンズ「都市計画のプランナーのもつ重要な役割とは、計画についてのラディカルな意見を投げかけること」「都市計画の帰結を住民と議論するときに、政治家のような役割を果たすこと、そして同時に住民にとっての都市計画の適切なアドバイザーであること」

→まちづくりではラディカルな意見が言えない？政治家かつアドバイザーになれない？

分析

社会学はこれまで都市計画に対してどのように向き合ってきたのか

- ・都市計画＝空間に対する工学的技術？
- ・奥井復太郎による見立て

都市計画の理想とは何か。いうまでもなく、その対象は都市であり、内容は市民生活である。したがって、都市計画は、市民生活にたいして美、利、健の三者を十分に満足せしむるを目的としている。これを都市計画における三位一体と呼びうるであろう。美とは、すなわち美をとつとび、これを守りかつ作り出すことである。利とは、すなわち利便であり、主として経済をさす。健とは、健康であって、市民生活上の保健にほかならぬ。この三者の均衡ある具体化は、都市計画の理想であること、多言を要せぬ…ところが現実において、この三者が、そうやすやすと均衡一致せしめらるべきものでない。往々にして各個は排他的である。ことに、美または健は、利と反することが多い(奥井 1975: 229-230)。

ゆえに、都市計画の問題は、帰着するところ、社会論となる。したがって、現在の計画において、また将来への計画において、都市計画にありては、土木、建築上の工学的技術が、多分に要求せらるると同時に、社会現象についての（ここでは市民社会についての）、社会科学上の、社会技術が要求されねばならぬ。社会科学に関する著者としては、我田引水の嫌いは多分にあるが、都市計画の根本大綱こそ、社会技術的に規定されるべきものだと思う（奥井 1975: 233）。

…しかし、むしろ都市の排他的関係に折り合いをつける技術より都市の関係性それ自体へと問題関心がむけられてきた。

e.g. コミュニティ論・パーソナルネットワーク論



反省的な問題提起：調整的メカニズムである都市計画を議論の俎上に乗せるべきではないか？

社会学的な検討を行うために

- ・主体の意味づけの複数性への関心
- ・科学（知識）社会学の導入＝ブルーノ・ラトゥールのブラックボックス理論
→同時代的には事実の真正が不確定であるにも関わらず、後の時代からみると、あたかもそれが確定された真実のように語られる。

系統的な証拠によって多少とも確認されるような知識が、どんな社会的脈絡から生じたか……すなわち、知識社会学がいちばん直接的な関心をもっているのは、科学であれ、哲学であれ、また経済思想であれ、政治思想であれ、とにかくそれらの専門家の知的所産なのである(Merton 1957=1961: 401)。

→ 「知識」の書き手が誰で、どういった組織に属していたのか、そしてその組織の社会的な位置を分析していくこと。

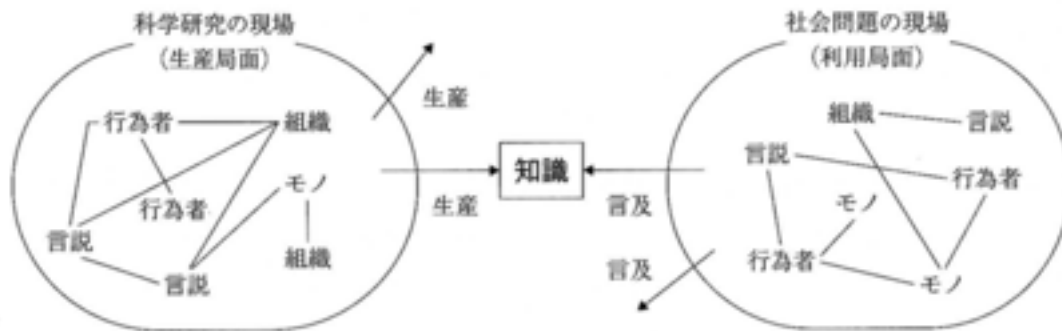


図1 知識の生産(出展 立石 2001: 55)



図2 知識のブラックボックス化 (出展 Latour 1987=1999: 26)

展望

田村のまちづくり論において重要な概念のひとつに「景観」がある。2005年に出された田村の著作は『まちづくりと景観』というタイトルが付けられている。そしてまちづくりの様々な要素のなかでもっとも分かりやすく見やすく、景観に関心を持てば「まち」への意識を高め、まちづくりへの関わりを促すものとして高く評価している(田村 2005)。しかし景観とは実に揺らぎやすい概念でもある。したがって田村のいう「景観」をナイーブに受け取るとは慎重にならなければならない。

- ・ 景観とは？
 - ・ 地理学におけるLandschaft
 - ・ ドイツ景観学の呪縛＝定義のあいまいさ
- ・ あいまいさは武器になる
 - ・ アメニティと概念の揺らぎやすさ

景観と総合性

・ 丹下健三の総合性

日本の都市計画に関する法には、なんら将来にたいする理想が感じられない。それどころか多くの場合、時代錯誤的なものである。さらに、関連法は官庁機構のセクショナリズムを反映して、総合性を失い、体系を見失ってしまっている。そのなかで都市計画は実体を失なって、観念的な慰みにならおうとしている。

しろうとの大胆さでいわせていただくならば、わたくしはこう提案したい。まず将来にたいする理想を、都市計画憲法として、新しい形で作りたい。それを軸として、建設関係諸法を徹底的に整理し、1つのシステムに統一したい。そういうフィジカルなものに結びつけることによって、はじめて、都市計画は、観念の遊戯から抜け出して、具体性を獲得するだろう。(丹下 1960: 91-2)

・ 高山英華の総合性

現在いろいろの計画をする場合に、総合ということは学問的にも行政的にも大変重要であると同時にきわめてむずかしい問題でもある。

地域計画という問題も、地方の地域について中央の各官庁が縦割り行政で所管争いをやっている。鉄道は運輸省、道路は建設省、工場は通産相などなどの各計画が現地では必ずしも一致して効果をあげていない。工場はできたが道路が間に合わない、住宅はできたが学校や病院がそれに伴わない、といった点が少なくない。そこでいま考えられている新産業都市の建設というときには、各省のばらばらな行政を現地ですましくまとめあげることが一つの大きな課題になっている。(高山 1963: 260-1)

→ トップダウン的傾向とボトムアップ的傾向

- ・浅田孝の都市計画に関する見立て

都市景観や都市構成と市民の生活意識との関係の分析から、人間生活の物理的な外部条件が、人間の生活の内容や意識活動の内部条件と密接なかかわりをもつという前提の下に、これらの外部の物理的状況を環境と呼ぶのである。生活の外部条件を構成しているところの物的施設やそのあり方、外部空間の形態や質、その量などが一体となって、都市環境を形成し、生活や生産の場の条件を左右する。(浅田 1969: 74)

個性のない混在性に都市独特の個性を与えることを可能にするような諸制度、諸方式の検討が行われなければならない。都市の精神、都市の景観、都市の文化そのものに関連した自然的、物的、あるいは文化的諸要因に対して再構成・再編成を約束するような方法の開発、とりも直さず、画一的な水準に止まっている官製都市計画万能のやり方に対して、真の都市計画、都市設計を確立する方式の開拓である。(浅田 1969: 75)

- ・田村明＝ボトムアップとトップダウンの中間領域の実践者

緑ゆたかな軸線を設けることは都市づくり百年の大計として意味がある。現時点の中央の力関係だけで計画が決められてはたまらない。まして「都市景観」のような価値にはまったく「本省」はない。地元自治体が主張するほかない。そこで企画調整局は、全体を調整するだけでなく、市の内部で主張する部局をもたない緑の軸線、大通公園、都市景観などの、将来の都市環境の質について主張しなければならなかった。他方において、企画調整局は、六大事業としての高速道路や地下鉄を推進する立場にあるが、それに加えて新しい価値の主張をし、なお全体を取りまとめ、計画案の具体的調整を行わなければならないのである。(田村 1983: 40)

- ・田村のまちづくり論が前提としていた読者層が中間領域＝自治体職員という仮説の検証
- ・まちづくりをバズワード化から逃れさせるべくこうした中間領域という戦略的な地平の意義を今後も問い続けなければならない＝ブラックボックスを開く
- ・田村を自治体職員がどのように読み、また田村によって自治体職員はどのように読まれたのか
↓
- ・田村のまちづくり理論を局所的文脈に閉じ込められない普遍性をもったものへと昇華

<文献>

今回の報告レジュメに利用したもののみ

浅田孝, 1969, 『環境開発論』鹿島研究所出版会

Gans, J, Herbert., 1993, People, Plans, and Policies, New York, Columbia university press.

Latour, Bruno., 1987, Science in Action, Cambridge, Harvard University Press(=川崎勝・高田紀代志訳, 1999, 『科学がつくられているとき——人類学的考察』産業図書.

Merton, Robert. 1957. Social Theory and Social Structure. New York: Free Press(=森東吾・森好夫ほか訳, 1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房.

田村明, 『都市ヨコハマをつくる』中公新書.

———, 1987, 『まちづくりの発想』岩波新書.

———, 2005, 『まちづくりと景観』岩波書店.

高山英華, 1963, 「都市計画のあり方」東京大学総合研究会編『東京大学公開講座 1 日本の都市問題』東京大学出版会, 251-269.

丹下健三, 1960, 「都市計画関連法規についての私見」東京市政調査会『都市問題』51(11), 84-92

立石裕二, 2011, 『環境問題の科学社会学』世界思想社.